連載

市長室からこんにちは

vol. 69

益田市長
山本 浩章

アユが勢いづく季節がやってきました。俳句においても「鮎」は夏の季語です。その一方、稚魚のうちは体が透き通っていることから「氷魚」と呼ばれ、こちらは冬の季語となっています。また、「若鮎」といえば春の季語であり、産卵期のアユを指す「落ち鮎」は秋の季語とされています。アユは四季を通じて親しまれる魚なのです。

清流高津川の名物であることは言うまでもありませんが、私の出身地である滋賀県東部を流れる犬上川にもアユが泳いでいます。母校の小学校の校歌には「ぼくもわたしも若あゆ子あゆ、ピチピチ跳ねようみな前向きに」とあったと記憶しています。

昔から「琵琶湖のアユは外に出て大きくなる」と言われます。琵琶湖にいると体長がせいぜい10センチのアユが、他県の川に放流されると2～3倍に成長することも珍しくないことを指し、しばしば、近江商人などこの地の出身者が地元に留まるよりむしろ京阪や関東、さらには海外に進出して活躍したことのたとえとされました。20年前に益田に向けて郷里を発とうとする、当時まだ二十代だった私への餞に、この言葉を掛けて励まして下さった方の思いやりは今も忘れることができません。

平成26年10月、益田市は合併十周年を記念して、「市の魚」の選定を行いました。スイセン（市の花）、ケヤキ（市の木）に並ぶ新たなシンボルを市民の皆様から公募した結果、圧倒的に多くの支持が寄せられたのがアユでした。また、平成27年6月策定の「教育に関する大綱」では、将来地元に帰って活躍する人材をアユになぞらえ、教育の目指す方向を示したところです。現在、市役所西側出入口の脇には、益田ロータリークラブさんから贈られたアユのモニュメントが置かれています。この先、玄関の真向かいに防災街区公園が完成すれば、いずれその付近に移設される見通しです。

3年続いたアユの不漁も昨年は持ち直したようです。関係機関と連携し、地域の特産品の復活にさらに努めたいと思います。

益田市の歴史文化の特色（全7回）

第1回 歴史文化基本構想と「雄大な自然と人の営みが生み出した景観」

【問い合わせ先】
市文化財課 ☎31-0623

益田市と益田市教育委員会は、全国に誇ることのできる市の歴史文化を後世に伝え、活用していくため、文化財の保護と活用のマスタープランとなる「益田市歴史文化基本構想」を策定することとしています（『第五次益田市総合振興計画後期基本計画』平成28年3月）。

この構想では、これまでの、国・県・市が特に重要であると認め、類型に従って指定する狭義の文化財だけではなく、指定には至らないものや従来の類型に当てはまらないものも広く文化財として捉えていくこととしています。その際は、それらを「相互に関連性のある一定のまとまり」として捉え、ストーリーを組み立て、文化財の魅力を高めるとともに、魅力的な形でわかりやすく価値を伝えるために、関連文化財群を設定することとしています。

本連載では、「益田市歴史文化基本構想」策定の過程で見えてきた市の歴史文化の特徴としての関連文化財群のテーマ案を紹介します。

その第一は歴史文化の基礎であり、全国の中でも卓越したすばらしい自然と景観をテーマとした「雄大な自然と人の営みが生み出した景観」です。

益田市は、眼前に広がる日本海、雄大な山々（恐羅漢山、大神ケ嶽など）、そして清流日本一の高津川、匹見川や益田川などの河川がおりなす複雑な地形の中に、すばらしい自然景観や天然記念物が存在します。美しい海岸線（土田、三里ケ浜、持石、飯浦の各海岸や唐音の蛇岩、鑪崎など）、西中国山地国定公園にも指定されている匹見峡や双川峡などの渓谷、栃原の高野槇や若杉の天然杉、金谷の城山桜などの巨樹があり、これらは見る人の心を奪います。

そして、そのような自然と長い歴史の中で、人々が営んできた景観にも見るべきものが多いです。津田、木部や飯浦などの湊町の景観、中垣内・大神楽の棚田や三葛・澄川などの農村・山村景観、益田の七尾城下や高津柿本神社の門前町などのまち並み景観、各地に見られる赤瓦の景観などは、益田ならではの景観であり、郷愁をかき立てます。

大神ケ嶽（益田市指定史跡および名勝）の立岩。益田市匹見町紙祖（三坂地内）。標高1,170ｍの大神ケ嶽は古来修験道の聖地として信仰の対象でもありました。